横浜医学，62，555-564（2011）

総　説（平成22年度横浜市立大学医学研究奨励賞受賞論文）

低用量アスピリン起因性小腸傷害の発生頻度・内視鏡的特徴・治療の検討
—カプセル内視鏡を用いた臨床研究—

遠藤宏樹
横浜市立大学附属病院 内視鏡センター

要　旨：日本人の高齢化と食習慣の欧米化で，脳血管障害や虚血性心疾患の予防のために低用量アスピリンの服用者数は増加の一途を辿っている．近年，カプセル内視鏡など小腸内視鏡の進歩により，アスピリンが胃・十二指腸のみならず小腸に多彩な病変を引き起こすことが明らかになった．健常者を対象に行った試験により低用量アスピリンが実際に小腸粘膜傷害を惹起することを実証し，傷害の発生頻度（粘膜欠損30%）についても明らかにした．アスピリン常用患者のカプセル内視鏡所見は円形潰瘍・地図状潰瘍・輪状潰瘍など多彩な炎症性病変を認め，頻度は少ないものの狭窄を呈する症例もあった．また潰瘍性病変は下部小腸に多い傾向を認めた．これら低用量アスピリンによる小腸傷害が出血や貧血など臨床上問題となることは少なくないが，適切な予防・治療法は確立されていない．基本的にはアスピリンの休薬が確実な治療であるが，基礎疾患の問題から休薬が困難なケースも多く，安全な治療・予防策が急務である．アスピリン小腸傷害に対してプロバイオティクスを用いた治療は小腸傷害を有意に改善させ，今後治療・予防薬としてその効果が期待される結果であった．

Key words: 低用量アスピリン（low-dose aspirin），カプセル内視鏡（capsule endoscopy），小腸傷害（small bowel injury），プロバイオティクス（probiotics）